

關於時間從屬句的考察之一 ——以「Saityuu」為中心——

江雯薰

淡江大學日本語文學系助理教授

要旨

「Saityuu」是用以做時間從屬句的形式。本稿的目的在於具體地考察「Saityuu」這個形式當成時間從屬句時是如何地使用及，在「Saityuu」的各個用法中如何地去取決其所表的共通意思和機能這二個部分。考察的結果是：在構文的特徵上，表「繼續性」的動態事物會出現在前文，表「完成性」「繼續性」的動態事物會出現在後文，後文會出現實現或未實現的事物等等；在意思的特徵上，透過和「Aidani」的比較，得知「Saityuu」有表某動作・變化處在最高峯的狀態中之意。

關鍵詞：「最中」、時間從屬句、同時關係、運動性、繼續性

airiti

A series of time-subordinate clauses-“Saityuu”

Chiang Wen-Shun

Associate Professor, Tamkang University

Abstract

“Saityuu” is a term to represent a subordinate clause of time. This study aims to specifically investigate how to use “Saityuu” in a subordinate clause of time, and to explore how to decide the common meaning and function among its various usages.

The results are: the characteristics of article-construction, dynamic events which express “continuity” occur in the preceding context; second, dynamic events which express “completion” and “continuity” occur in the following text. Accomplished or unaccomplished events also occur in the following context. The characteristics of the meaning, through the comparison with “Aidani”, aims to acknowledge about “Saityuu” to represent a certain motion. The point of change means the condition of the peak.

Key words: “Saityuu”, time-subordinate clauses, simultaneous relationship, motion, continuity

時間従属節に関する一考察
—「サイチュウ」を中心に—

江雯薰

淡江大学日本語文学科助理教授

Abstract

言葉

1. はじめに

現代日本語における時間従属節には、「アイダ(ニ)」「ウチ(ニ)」のように、二つの事態の同時性を表す形式、「アト(デ)」「マエ(ニ)」のように、継起性を表す形式、「トキ(ニ)」のように、同時性と継起性の両方にまたがる形式がある。その中で、「サイチュウ」(「最中」¹と表記される)は、「アイダ(ニ)」「ウチ(ニ)」と同じく、同時性を表す時間従属節として取り扱われている形式である²。「サイチュウ」が用いられる基本的文型には、次のようなものがある。

(1) 恋は、悩んでる最中が一番胸ときめくね!

(<http://yukimaru.269g.net/article/530579.html>-2006年5月20日-13k-)

(2) 抱き合っている最中のことで、突発的に口走ってしまった。感情が理性を超えていた。(冷静)

Key words: "Saityuu", time-subordinate clauses, simultaneity

¹「最中」の読みには、「サイチュウ」のほかに、(1)(2)のように「サナカ」とされるものもある。

(1) 帰りはみぞれ混じりの雨で寒く、母と石焼いも半分こ。寒い最中、家に着く前が非常においしかった。

(<http://d.hatena.ne.jp/companion0/20040304>)

(2) 夏バテ防止には、程よく効いたクーラーのお部屋で快適に過ごす。暑い最中、わざわざ外に出ない。

(<http://www.hontaka.co.jp/danwa/taisaku/natubate/natubate.html>-15k)

²本稿は、時間従属節の体系をより補完するために、筆者の学位論文では取り扱っていない「サイチュウ」を取り上げることにした。

- (3) 飢饉の最中、名手本陣の御っさんである彼女には加恵にばかりかまけている閑はなかった。(華岡)
- (4) その夜半、宮のご病氣平癒の祈祷最中、物の怪が憑依者に憑いた。(新源氏)
- (5) が、相手が喋っている最中、失礼のないように相づちをうちながら、いっきに食べる。(皆勤)
- (6) とりあえず、前巻は読んでる途中で一度ゴミ箱に叩きつけたわけですが、今回は読んでる最中でページを破りかけました。
(<http://crymson.s22.xrea.com/yybbs/yybbs.cgi?mode=past-40k-2004年11月9日>)
- (7) あるとき、合唱している最中に、一人の兵隊が隣の人を肘でつついて、指で見物人の方をさしました。(豎琴)
- (8) バーの外では、純子と谷口がいい加減くたびれて、大欠伸の最中だった。(女社長)

(1)～(8)の「サイチュウ」は、品詞の観点からみると、いわゆる名詞であるが、常に(1)(2)のように修飾語を伴う形で名詞句として、(3)の「[名詞]+ノ+サイチュウ」と、(4)の「[名詞]+サイチュウ」という形で副詞句として用いられる。(5)の「最中」、(6)の「最中で」、(7)の「最中に」は、修飾節を受ける従属節であり、接続助詞的に用いられている用法であるが、(8)は文末に置く用法である。

本稿では、(5)のような従属節の用法を中心に、「サイチュウ」を含む文(以下では、「前件」と称する)と、後続する文(以下では「後件」と称する)の構文的特徴または意味的特徴を考察する。そして、「サイチュウ」の意味・用法を明らかにすることを目的としている。

2. 先行研究とその問題点

「サイチュウ」については、管見に及ぶ限り、これまでの研究では論究されていないようである。辞書類においては、『日本語文型辞典』(1998)や、『大辞泉』(1998)や、『大辞林』(1999)や、『日本国語大辞典』(2001)などによる解釈がある。それらの解釈について、次

の通りである。(6)

『日本語文型辞典』(1998)は、「サイチュウ」について、「ちょうどその行為・現象が進行しているところ」とし、また「進行中に突然何かが起こるという場合に使うことが多い」ともしている。

『大辞泉』(1998)は、「動作・状態などが、いちばん盛んな状態にあるとき。進行中のとき。まさかり。さなか。「今が暑いーだ」「食事のー」と述べている。

『大辞林』(1999)は、「動作・状態が現在進行していること。物事がたけなわの時。さなか。「試合のーに雨が降り出す」としている。

『日本国語大辞典』(2001)は、「ものごとが最もたけなわであるとき。まさかり。もなか。さなか」と説明している。

以上の辞書の解釈を見ると、「サイチュウ」の語義に関する記述はなされているが、詳しい用法の説明はなく、「サイチュウ」を、時間を表す形式ではなく、名詞として取り扱っていることが明らかであると思われる。

また、『日本語文型辞典』(1998)の「進行中に突然何かが起こるという場合に使うことが多い」という記述は、次の(9)で説明がつく。

(9) …見られたかも。彼へのベストを編んでいる最中、突然母が部屋に来た。(http://blackbox.exblog.jp/1079380)

(9)では、前件の「彼へのベストを編んでいる」ことは、「動作継続」を表す事態である。この場合は、『日本語文型辞典』(1998)の「進行中」は、「動作の進行中」という意味になる。また、

(10) 実は一昨日、例の同僚君が体調を崩している最中、実家から電話がありました。

(http://www.geocities.jp/gonta_2001jr/2003_10.html)

(10)では、前件の「例の同僚君が体調を崩している」ことは、「結果継続」を表す事態である。このような場合も「サイチュウ」の前件として捉えることができるが、『日本語文型辞典』(1998)の「進行中」という意味のみで解釈していいのかどうかについては疑いが残

る。このようにみると、『日本語文型辞典』(1998)の「進行中」というのは、具体的にどういうものがあるのかを究明する必要があると思われる。

以上のことをみると、「サイチュウ」それ自体の持っている機能、及び意味・用法などを単なる語義で説明することは、不十分であると思われる。

本稿は、「サイチュウ」を一つの時間従属節として取り扱い、前件と後件における構文的な特徴及び意味的な特徴などを究明する。構文的な特徴については、前接する述語の語形及び語彙的な意味、文末の述語のアスペクトとモダリティなどからみる。意味的な特徴については、「アイダニ」との置き換えを手掛かりにして考察する。

3. 構文的な特徴

3.1 前件における構文的な特徴

まず、「サイチュウ」に前接できる動詞の語形をみる。

(11) 洗濯物を畳んでいる最中、電話が鳴った。

(http://members.aol.com/Gurishima/novel_4.htm)

(11') 洗濯物を{○畳む/○畳んでいた/*畳んだ}最中、電話が鳴った。³

(11)(11')をみると、前接できる動詞の語形は、「スル」形、「シテイル」形、「シテイタ」形のいずれかであることが分かる⁴。「スル」形、「シテイル」形、「シテイタ」形のどれを使っても、意味が大きく変わることはなく、継続しているという意味を表す⁵が、「シタ」

³本稿では、類似形式に置き換えられるかどうかは、{}の中で示すことにする。また、{}の中の形式、及び作例の中の形式をカタカナで示すことにする。

⁴実例(501例)の中で、「スル」形を用いる場合は102例(全体の20.36%)、「シテイル」形を用いる場合は358例(全体の71.46%)、「シテイタ」形を用いる場合は41例(全体の8.18%)である。このことから、一番多く用いられている語形は「シテイル」形であると言える。

⁵アスペクトの観点からみると、「シテイル」形と「シテイタ」形のどちらを使っても、「継続している」という意味を表す。だが、テンスの観点からみると、「シテイル」形を使うと、主節のテンスに依存している相対的テンスの解釈

形を用いると、「完了」の意味になる。このことから、「サイチュウ」の前件が継続している事態を受けていることを表している、と言える。

また、「サイチュウ」には、(12)の「優しい」のような形容詞、(13)の「穏やかだ」のような形容動詞、(14)の「優れている」や(15)の「馬鹿げている」のような動詞は前接することはできない。

(12) *父親の性格が優しいサイチュウ、～。

(13) *彼の人が穏やかなサイチュウ、～。

(14) *彼は優れているサイチュウ、～。

(15) *そのやり方は馬鹿げているサイチュウ、～。

(12)の「優しい」、(13)の「穏やかだ」、(14)の「優れている」、(15)の「馬鹿げている」は、ともに主体の属性・性質を述べているものである。このように、属性・性質を述べている文の場合に、「サイチュウ」を用いると、非文になる。

(12)～(15)のように、属性、性質などを表す形容詞、形容動詞、動詞は前接できず、(11)のように動作・変化を表す動詞は前接できる、ということから、前件には「運動性」が必要であると言える⁶。

になるが、「シテイタ」形を使う場合は、発話時点を基準とする絶対的テンスの解釈になる。

⁶ 「運動性」が必要であることは、(1)のような形容詞や、(2)のような名詞が前接できることから反映されている。

(1) 忙しい最中、いろんな人のお芝居を観に行ったり、ライブやパーティに出掛けたり…。もちろん飲む事も忘れず、アル中になってしまうんじゃないかと云う位飲みまくりました。

(<http://homepage1.nifty.com/shounen-tenshi/shounen9/shounen9-003.htm>)

(2) 分列行進の最中、故意に企んだように彼のゲートルがほどけだしてくる。(楡家)

(1)の「忙しい」は「する事が多くて暇がない」を表す。それは、実際の動作・変化ではないが、気持ち的に動的意味を持ち、時間的な幅を持つ状態である。

しかし、次の(16)(17)のように、「運動性」を持つ動詞であっても、前接できない場合もある。

(16)*船長が一瞥するサイチュウ、乗組員達は下を向いていた。

(17)*老人が死ぬサイチュウ、一度目を開けた。

(16)(17)で、「一瞥する」「死ぬ」に共通しているのはその表している動作には「継続性」がない、ということである。だが、次の(18)(19)のように、動詞に「継続性」がなくても、非文にならない場合もある。たとえば、

(18) 通りを闇が包み、空が紺色に変わる最中、サトシは直ぐに見えなくなった。

(<http://www.geocities.co.jp/Bookend-Akiko/2240/koi02.html>)

(19) 老人が死んでいくサイチュウ、一度目を開けた。

(18)では、「通りを闇が包み、空が紺色に変わっていくうちに、サトシは直ぐに見えなくなった」という意味を表す。「空が紺色に変わる」まで時間がかかるのである。この文が適格になるのは、そのためである。つまり、一時点の変化を表す「変わる」を伴っても、「空が紺色に」という補語によって、「継続性」が生じてくる。同じ説明は、(19)にも反映される。(19)の「死ぬ」も一時点を表す動詞であるが、「死んでいく」全体は瞬時に起きる事態ではなく、「継続性」のある事態である。

このようにみえてくると、前件は、「運動性」だけでなく、「継続性」を持つことも必要であると言える。ただし、その継続性は(20)(21)のように、「状態継続」ではなく、(22)～(24)のような「継続性」を表す場合もある。

(20)*お客がいるサイチュウ、熱心に接待した。

このように、前接できる形容詞には、「忙しい」のほかに、「慌しい、苦しい、楽しい、やかましい、…」がある。また、(2)の「分列行進」は「分列が行進する」ことを表し、動的意味を表す名詞である。

(21) *外国人が同じマンションに住んでいるサイチュウ、盗難が多発した。

(20)の「お客がいる」には、継続性はあるが、運動性はない。もし、それを「来客がある」に入れ替えると、許容度が高くなる。それは、「お客が来ている」と解釈され、動作を表すことができるからである。また、(21)の「外国人が同じマンションに住んでいる」は、同じマンションに長く生活する状態を意味している。(20)(21)のどちらも動作・変化を表すものではなく、「状態継続」を表すものである。このような動詞が「サイチュウ」に前接すると非文となるのは、前件に「運動性」がないことに由来する。

(22) キーを叩いている最中、ふと涙がこぼれた。
(<http://www.jouhoumou.net/~ndo/wildvox000715.html>)

(23) 実は一昨日、例の同僚君が体調を崩している最中、実家から電話がありました。
(http://www.geocities.jp/gonta_2001jr/2003_10.html)

(24) 私自身の中に今までより堅固な信念が芽生えた。先方のチームが来ている最中、私は病院のベッドにいてこのことに気がついた。
(<http://www.tc-r.com/newsltr/Old-Effect/E131-140R.htm>)

(22)の「叩いている」は「動作継続」、(23)の「崩している」は「結果継続」、(24)の「来ている」はパーフェクト、といった継続性⁷を表す。

次に、「サイチュウ」に前接する際に、「運動性」と「継続性」のどちらも持つ動詞の語形を見る。

前述したように、前接できる動詞の語形は「スル」形、「シテイル」形、「シテイタ」形のいずれかが可能である。たとえば、(22)の「叩いている」を(22')の「叩く」「叩いていた」に換えても、意味が大きく変わることがない場合もある。

⁷ パーフェクトについて工藤(1995: 99)を参照。

(22') キーを{○叩く／○叩いていた}最中、ふと涙がこぼれた。
(22')では、「スル」形、「シテイル」形、「シテイタ」形のどれかを使っても、「動作継続」の意味になる⁸。

それに対して、(23)(24)のように、「スル」形と「シテイタ」形に換えると、意味が大きく変わる場合もある。以下の(23')(24')がその例である。

(23') 実は一昨日、例の同僚君が体調を{*崩す／○崩していた}最中、実家から電話がありました。

(24') 先方のチームが{○来る／○来ていた}最中、私は病院のベッドにいてこのことに気がついた。

(23')のような場合は、「崩す」の「スル」形を用いることはできないのに対して、「シテイタ」形を用いることはできる。「崩していた最中」を使うと、「体調を崩して、今もその状態が続いている」という意味を表す文になる⁹。つまり、「崩したあとの状態」を表す。それは、いわゆる「結果継続」である。一方、(24')のような場合は、「来る」の「スル」形と「シテイタ」形のどちらも用いることはできるが、それぞれの意味が異なっている。具体的に言うと、「来る最中」を用いると、「やって来ている途中、つまり移動の途中」になるが、「来ていた最中」を用いると、「既に到着してここに滞在している状態」になる。

(22)～(24)から、「サイチュウ」に前接する動詞には「スル」形、「シテイル」形、「シテイタ」形のいずれかが来るが、置き換えられるかどうかは「スル」形、「シテイル」形、「シテイタ」形の表す意味からの制約がある、と言える。

以上のことをまとめてみると、「サイチュウ」に前接するのが「運

⁸ 「叩く」は「同じキーを複数回叩く」「異なるキーを複数回叩く」といった多回動作と捉えれば、「キーを叩く最中」が非文とならない。

⁹ テンスの観点からみると、「崩していた最中」の「シテイタ」形は発話時点を基準とする絶対的テンスを表すが、「崩している最中」の「シテイル」形は主節のテンスに依存している相対的テンスを表す、という点で異なっている。

動性」また「継続性」を持った「スル」形、または「シテイル」形、「シテイタ」形で表す文であることからすると、前件は継続している動的事態を表している、と言える。

3.2 後件における構文的な特徴

後件における構文的な特徴については、アスペクトとモダリティの観点から考察を行う。

後件の述語が運動動詞である場合は、(25)(26)のように、「スル」形、「シタ」形で、(27)～(29)のように「シテイル」形で表すことができる。

(25) 国内セット品の低迷と海外生産化が進む最中、携帯電話の小型化と国内需要開拓に直結したフレックシリジット基板市場を調査する。(http://www.fcr.co.jp/024q11.htm)

(26) 友達がシャワーに入っている最中、急に停電になった！
(http://www.geocities.co.jp/NatureLand-Sky/5328/myanmar/0913.html)

(25)のように述語を「スル」形で、(26)のように「シタ」形で表すことができることから、後件は完成的に捉えられている事態である、と言える。

後件の述語は「シテイル」形で表すと、次のようになる。

(27) イラストに色を塗っている最中、ずっと雨が降っていた。
(http://shore.milkcafe.to/diary/may1_02.htm)

(28) 刑事が捜査しているサイチュウ、犯人はもう死んでいた。

(29) 嵐のように物事が流れる最中、赤木リツコは姿を消していた。
(http://eternally.gooside.com/original_2/x_masevala.html)

(27)のように「動作継続」、(28)のように「結果継続」、(29)のよう

にパーフェクト性を表すことができる¹⁰。この三つの場合は、いずれも後件が継続的に捉えられている事態である。

次に、後件の述語が「いる」のような状態を表す動詞である場合を見る。

(30) ピッコロがキッチンに立っている最中、悟飯は必ずリビングにいる。

(<http://www.h2.dion.ne.jp/~hyakka/f.j.gato.htm>)

(30)では、後件の「いる」を見ると、その表す事態が継続的に捉えられている状態であると言える。

(25)～(30)から、後件は完成的、または継続的に捉えられる事態であると言える。

次に、後件が実現した事態であるかどうかをみる。

(25)(30)のように、後件が実現されていない事態である場合もあれば、(26)～(29)のように、後件が実現された事態である場合もある。このことは、次の(31)～(34)のように、後件のモダリティの制限からも反映されている。

(31) 彼がサッカーをしているサイチュウ、私が一人でスタンドで見守っていよう。

(32) 彼らがバカンスを楽しんでいるサイチュウ、私たちはプールにでも泳ぎに行こう。

(33) 食事をしているサイチュウ、馬鹿笑いは慎みなさい。

(34) しゃべっているサイチュウ、話に割り込むな。

(31)～(34)を見ると、後件の述語が話し手の意志・勧誘・命令・禁止などの表現とは共起することができると言える。このことから、いずれも実現されていない事態¹¹として捉えられていると言える。

¹⁰本稿ではアスペクトの捉え方については工藤(1995)を参照。また、(29)の主節が「シテイク」形で全体を過去の出来事として発話していると捉えることができるので、「過去パーフェクト」の解釈もできる。

¹¹後件が実現されていない事態として捉えられる場合は、その後件の述語が「スル」形で表すのが少ない。この場合、習慣として用いられるなら、非文とならない。

このように、文末におけるアスペクトからみると、「サイチュウ」の後件は、完成的、または継続的に捉えられる事態であると言える。また、文末に現れたモダリティ形式からみると、その後件の表す事態は実現の事態か未実現の事態のどちらかであるとも言える。

3.3 前件と後件の関係

前件と後件における時間関係については、それぞれが継続的、または完成的に捉えられる事態であるかどうかから見ると、次のようになる。

A. 前件と後件が共に継続的に捉えられる事態である場合

(35) 40度近くまで気温が上がる最中、私はクッションを作っていた。

(<http://planter-forest.hp.infoseek.co.jp/7gatu2.html>)

(36) そのおじいさんは山登りをするサイチュウ、心筋梗塞で息を引き取っていた。

(37) 嵐のように物事が流れる最中、赤木リツコは姿を消していた。

(http://eternally.gooside.com/original_2/x_masevala.html)

(35)～(37) (前掲の(29))では、前件の述語のいずれも「スル」形で表すが、それぞれの前件は継続的な意味を表す。また、後件の述語をみると、いずれも「シテイル」形で表し、後件全体は継続的な意味を表す。ただし、その継続的な意味には、(35)の「クッションを作っていた」のように「動作継続」、(36)の「息を引き取っていた」のように「結果継続」、(37)の「姿を消していた」のようにパーフェクトを表すものがある。

このように見ると、「サイチュウ」の後件が、前件の継続している時間帯に平行して起こっている事態であることが言える。

B. 前件が継続的に、後件が完成的に捉えられる事態である場合

(38) 入浴の荷物を下ろす最中、女はふと明かりの付いてる部屋を見上げた。

(<http://tsubasa2001.jugem.cc/?day=20030914>)

(39) 話している最中、母に円卓の下で背広の裾を引かれた。(遠雷)

(40) 不安に成っている最中、自宅の電話が鳴った。

(<http://adagio.fc2web.com/ne-2.htm>)

(41) 世界的戦争が起こっている最中、日本は対核ドームを発明する。

(http://p31.aacafe.ne.jp/~redcross/shikou/s_p_2.htm)

(38)の「入浴の荷物を下ろす最中」は「入浴の荷物を下ろしている間」、(39)の「話している最中」は「話している間」と解釈できるので、いずれも「動作継続」を表す。また、(40)の「不安になっている最中」は「不安になったあとの状態が続いている」こと、つまり「結果継続」を表す。(41)の「世界的戦争」を単一の事態として捉えるとすると、「世界的戦争が起こっている最中」は、「世界的戦争が起こったあとの効力が持続している」こと、つまりパーフェクトを表す。

このように見ると、(38)～(41)の前件の述語においては、(38)は「スル」形で、(39)～(41)は「シテイル」形で表すが、いずれも前件が継続的に捉えられる事態である、と言える。

また、(38)～(41)の後件の述語を見ると、「シタ」形と「スル」形のどちらかで表し、後件全体が完成的に捉えられる事態である。

以上のことから、「サイチュウ」の後件の事態は、継続している前件の表す時間帯、あるいはある特定の時点に起こらなければならない事態である、ということが言える。

AとBをまとめてみると、「サイチュウ」に結ばれた前件と後件の関係には、前件が継続している間、後件が平行して起こっている、という関係もあれば、前件が継続している間に後件が起こる、とい

う関係もある、と言える。

4. 「サイチュウ」の意味・用法について

本節ではこれまでの考察から、「サイチュウ」の意味・用法を考える。

まず、前件と後件で現れた構文的な特徴と、前件と後件の意味関係とを考え合わせると、二つの事態・出来事は、「サイチュウ」を用いることによって、「前件の事態が継続している時、後件の事態が平行して起こっている」と、「前件の事態が継続している時に、後件が起きる」といった時間関係を表すことができる。前者は(42)のように「アイダ」に、後者は(43)のように「アイダニ」に置き換えることができる。

(42) 川越 IC で高速をおり、皆が料金を払い終わるまで待つ最中 {○アイダ}, 僕は頭の中でぼーっと考えを巡らせていた。

(<http://home3.highway.ne.jp/sgt/kaze/glory/9507.htm>)

(43) 手袋を買っている最中 {○アイダニ}, 飯沼君がレインコートを買った。(<http://www.nmt.ne.jp/~link/3.htm>)

(42)では、後件の「僕は頭の中でぼーっと考えを巡らせていた」ことは、継続的に捉えられる事態である。(43)では、後件の「飯沼君がレインコートを買った」ことは完成的に捉えられる事態である。このようにみると、「サイチュウ」の後件は、継続的に捉えられる事態である場合は、「アイダ」に近い意味を表すが、完成的に捉えられる事態である場合は、「アイダニ」に近い意味を表す、ということが言える。だが、集めた「サイチュウ」の501例の中で、後件が継続的に捉えられるのは65例あるが、完成的に捉えられるのは436例ある。その使用頻度を見ると、「アイダ」と「アイダニ」の比率は1:6.71となる。このことから、「サイチュウ」は「アイダニ」の意味として用いられる頻度には「アイダ」より6倍以上の差もあると言える。

つまり、「アイダニ」としての意味はよく用いられている。以下では、「アイダニ」との置き換え¹²により、「サイチュウ」の意味的な特徴を考察する。

まず、「サイチュウ」と「アイダニ」が互いに置き換えられる場合を見る。

- (44) 友達がシャワーに入っている最中 {○アイダニ}, 急に停電になった!
(<http://www.geocities.co.jp/NatureLand-Sky/5328/myanmar/0913.html>)
- (45) その原稿を書いている最中 {○アイダニ}, 山崎が彼のもとへ学会からの流出文書を届けた。
(<http://norimaki.faithweb.com/c212.htm>)
- (46) 幸子が説明している間に {○サイチュウ}, 忠紘は電話台に目をやる。(素晴らしき)
- (47) しかし、広間でこの光景がくり広げられている間に {○サイチュウ}, ハレムの浴室では、浴槽の中で幼児が殺されていた。(陥落)

(44)(45)のように、「サイチュウ」の代わりに「アイダニ」としてもそれほどおかしくないし、(46)(47)のように、「アイダニ」を「サイチュウ」となおしても不自然にはならないが、ニュアンスが若干異なる。それは、「サイチュウ」にすると、その文の話し手もしくは主体が、前件の表す時間帯に集中して何事かしている、という意図が背後にあることが推測される。つまり、「アイダニ」の場合には、前件と後件の時間関係により焦点が置かれるのに対して、「サイチュウ」の場合には、話し手または主体の立場により焦点がある、と考えられる。

¹² 次の(1)((47)を再掲)を見ると、「サイチュウ」よりも「サイチュウニ」の方が「アイダニ」に近いと思われる。

(1) しかし、広間でこの光景がくり広げられている間に {サイチュウニ}, ハレムの浴室では、浴槽の中で幼児が殺されていた。(陥落)
だが、本稿では「サイチュウ」の意味・用法を説明することを目的にするので、「サイチュウニ」と「アイダニ」の異同性を今後の課題として考察する。

それに対して、二形式が互いに変換できない、ないしは不自然になる例を見る。まず、「サイチュウ」を「アイダニ」に置き換えられない例を見る。

(48) 祈っている最中 {*アイダニ}, 周囲に気を配った。

(http://www.d3.dion.ne.jp/~ccsakura/to-go/D&M_7_2.htm)

(49) ヤミ献金疑惑で自民党への逆風が吹く最中 {*アイダニ}, 新潟県を中心とした地震が発生し被害をもたらした。

(<http://www.h7.dion.ne.jp/~sports7/sub6.html>)

(48)は、「祈っている真っ最中に周囲に気を配った」という意味を表す。だが、「サイチュウ」を「アイダニ」に置き換えると、後件は単に前件の表す時間帯のある時点に起きるという意味を表していることになる。また、「祈っている」が示している時間帯を見ると、「アイダニ」の場合、始まりと終わりを表す枠があるが、「サイチュウ」は、その枠がはっきりしていない。つまり、「アイダニ」を用いると、ある範囲によって限られた一続きの時間帯に事態が起きる、という意味を表すが、「サイチュウ」を用いると、ピーク時に焦点が置かれるので、両端がぼやけるようになる。このことは、「最中」という漢字で書かれるところからも反映されている。同じことは(49)で説明がつく。(49)は、ヤミ献金疑惑で自民党への逆風が吹くという状態の中で、新潟県を中心とした地震が発生し被害をもたらした、という意味を表す。「アイダニ」に置き換えると、そのピーク時の盛んな動作・変化という意味合いが読み取れないと思われる。

次に、「アイダニ」を「サイチュウ」に置き換えられない例をみる。

(50) 生活と闘うようなつもりで毎日暮らしている間に{*サイチュウ}, 町の様相はあちこちで変わっていた。(情景)

(51) 塔を昇っているあいだに{*サイチュウ}, あたりは夜になっていた。(植物群)

(50)では、前件の「毎日暮らしている」ことは、運動性を持たず、

静的な状態を表す事態である。つまり、盛んにしている状態の意味合いが含まれていない。また、(51)では、前件の「塔を昇っている」ことには運動性があるが、後件の「あたりは夜になっていた」ことは、単なる状態を表す事態である。この場合、後件が、盛んな動作・変化が起きている間に起きた事態としての読みが取れない。これらの例をみると、運動性がない、または運動性があってもその盛んな状態に後件が起きるといふ読みが取れない場合は、「サイチュウ」に置き換えられない、ということが言える。同じことは、次の(52)～(57)からも反映されている。

(52) 自分が北海道に出張している間に{*サイチュウ}、見えない流れが渦巻いてこの主任の周囲に押し寄せたことを知った。(点)

(53) 私がぼんやりとそんなことを考えているあいだに{*サイチュウ}エレベーターのドアが開いた。(世界)

(54) 葉子が手水を使っている間に{*サイチュウ}、高島は外出用のフ란コの背広に着替えた。(花影)

(55) 私が私の思考を少しずつときほぐしているあいだに{*サイチュウ}いちばん右の乾燥機のドラムが停まった。

(56) 七瀬がロング・サイズの煙草を一本喫う間に{*サイチュウ}五人の客があった。(恋人)

(57) 金川は暮れていく海を見ながらいった。ふたりの心はそこまで来る間に{*サイチュウ}すっかり通じ合っていた。(孤高)

このように見ると、状態性のようなものが前件に来られないことと、前件の表す時間帯の両端がぼやけていることから、「サイチュウ」には集中して何事かしてる前件があり、後件でそれを覆す状態がある、ということが言える。つまり、そのピーク時の盛んな動作・変化を表すことは、「サイチュウ」自体の持っている語彙的な意味であると言える。

5. まとめ

これまで構文的、また意味的な特徴などの観点から「サイチュウ」を考察してきた。

構文的な特徴については、前件は「動作継続」、「結果継続」、パーフェクト、といった継続性を表す事態である。つまり継続的に捉えられている事態である。それに対して、後件は完成的、または継続的に捉えられている事態である。また、文末の述語のモダリティからみると、実現の事態と未実現の事態として用いられることができる。

意味的な特徴については、「ピーク時の盛んな動作・変化」を表し、このことは、「サイチュウ」自体のもっている語彙的な意味からきたものである。

だが、「サイチュウ」の意味・用法だけではなく、「サイチュウ」と同じく線としての時を基準とする形式、たとえば「トチュウ」との相違を明らかにすることも必要である。

(58) 「話を聞いている途中、何度もわしの心は動揺した。」(武士(下))

(58') 「話を聞いているサイチュウ、何度もわしの心は動揺した。」

(58)では、「トチュウ」を「サイチュウ」に置き換えると、文全体の意味を大きく変えることはない。しかし、次の(59)のような場合もある。

(59) 小渕外相は、二十一日にブラジルで開かれる日本人移住九十周年記念式典に出席する途中、米国に立ち寄った。(朝日1998, 6, 20)

(59') 小渕外相は、二十一日にブラジルで開かれる日本人移住九十周年記念式典に出席するサイチュウ、米国に立ち寄った。

(59)の「トチュウ」は、(59')のように「サイチュウ」に置き換えることはできない。このことから、「トチュウ」と「サイチュウ」は同じく線としての時を基準とする形式であり、その間に類義関係はあ

参考文献

I 著書・論文

藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』東京, ひつじ書房, pp. 221-260

寺村秀夫(1977)「連体修飾のシンタクスと意味—その2—」『日本語・日本文化』5 東京, 大阪外国語大学留学生別科 (『寺村秀夫論文集 I 日本語文法編』くろしお出版(1993)再録, pp. 209-260)

寺村秀夫(1978)「連体修飾のシンタクスと意味—その4—」『日本語・日本文化』7 東京, 大阪外国語大学留学生別科 (『寺村秀夫論文集 I 日本語文法編』くろしお出版(1993)再録, pp. 297-320)

渡辺実(1983)「時間的限定の意味と文法的機能」渡辺実(編)『副用語の研究』東京, 明治書院 (『寺村秀夫論文集 I 日本語文法編』くろしお出版(1993)再録, pp. 127-156)

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』東京, ひつじ書房

三上章(1970)『文法小論集』東京, くろしお出版, pp. 125-144

南不二男(1974)『現代日本語の構造』東京, 大修館書店, pp. 114-131

南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』東京, 大修館書店, pp. 74-120

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『新日本語文法選書4 モダリティ』東京, くろしお出版, pp. 17-77

森田良行(1984)『基礎日本語辞典』東京, 角川書店, pp. 16-20

森山卓郎(1990)「意志のモダリティについて」『阪大日本語研究』2 東京, 大阪大学文学部日本学科(言語系)

II 辞書

グループ・ジャマシイ(1998)『日本語文型辞典』東京, くろしお出版, pp. 126

小学館国語辞典編集部(2001)『日本国語大辞典』第二版東京, 小学館

小学館『大辞泉』編集部, 松村 明(1998)『大辞泉』東京, 小学館

